

無名兵士は語る…

限定五百部

長州諸隊
維新戦没實歴談

出版部創設
20周年記念
維新回顧録叢書3

児玉如忠 編

マツノ書店

内容見本

見ると既に刺違へて遣つて居る夫れではまだ外にも居るだらうと云つて彼方の押入を開け此方の押入れを開けて見ると皆押入れの中に這入り込んで居ると云ふやうなことでありまして既に刺違へたり何かした部分は致方ないが眼玉を開けて居るやつは引つ張り出せと云ふやうなことで引つ張り出して頭を斬つて遣れと云ふとどうか生命丈けは助けて呉れと云ふ馬鹿なことを言ふなと云ふ様なことで其の時分にはまだ今のやうな元氣と違い却々吾々も旺んな時でありましたし又薩州人も土佐人も頗る亂暴なものでありました其の當時あれは何んと申しましたか舊幕の佛式を遣つた兵が居つた之れば鐵砲とランドセルを擔いで刀も何も差して居らぬそんな奴は皆頭をもげと云ふやうなことで南瓜を切るやうな積りで皆頭をもいだと云ふやうな始末がらでありましたが遂に其所も先づ鎮靜を致したと云ふことになつて先づ木更津から姉ヶ崎を経まして姉ヶ崎から乗船を致して靈岸島へ歸つて來たのであります斯う云ふ事が實は私が此の江戸へ參つての始めての戦争である夫れは私許りではない其の四番大隊の一番小隊は始めての戦争でありましたが其の後に中仙道の部分が白河を攻撃したと云ふこ

らぬと云つて身支度をして水盃をした、其時に親も泣く自分も是ぎりだと思つて別れましたが其時無事に歸つたと云ふので又泣いたが是は喜びの泣きであつたそれから第二番には干城隊に付きまして伏見戦争後に元徳公が今度御上洛になるに就て此お供をして行くことになつた、是も君國の爲であるから何時どう云ふ事があつて死なねばならぬかも知らぬと言つて此時も親と水盃をして泣いて分れましたが此時も無事に歸つたので喜んで又泣いた、それから第三番でございませした會津征伐に行くことになつた時に今度こそ愈よ本當の別れだと思つて水盃をして泣いた、此時は自分でも生きて歸らうとは思はぬし母も又そう思つて別れましたが、又私が無事に歸つたので又泣いた、丁度三度は別れる時の悲しみの泣き又三度は喜びの泣きで都合親を泣かしたことが六度でございませ、是は唯一つの私の事でなく當年の五十年祭をするに當つてわが防長五百何十人の戦死者の各家々におかれましても斯の如き以上の苦心をされたことと思ひませ、其當時に防長二州の國民は残らず斯の如き精神があつたればこそ其時の御維新も出來たので又此防長人が親を泣かしたと云ふのは詰り斯う云ふことで親を泣いたのであ

維新戦役長藩出兵年表

兵庫京阪方面

十慶一應一月廿五年

諸隊總督毛利内匠、諸隊駐引山田市之允諸隊參謀片野十郎、毛利内

匠參謀國貞直人、小田村素太郎、奇兵隊一中隊百十人、參謀片野十郎、小隊司令三浦

好六郎、遊擊隊一中隊九十七人、參謀後藤深造、小隊司令、鷹懲隊一小

隊四十人、參謀平野光次郎、整武隊一中隊九十七人、參謀田村甚之九郎

隊三郎、治厚東、銳武隊一中隊九十七人、參謀小笠原美濃介、小隊司令、振武隊一中

隊九十八人、竹本多門、石川原、小隊司令、第二奇兵隊一中隊百二十五人、參謀

又兵衛、林半七、小隊司令、相木、右田毛利家兵一中隊九十三人、惣轄土肥村上波門軍

衛門野左、三田尻發船兵庫に向ふ

十一月二十八日

岩國藩日進隊一中隊約百人、惣督宮庄主水副督、齋谷鼎助、參謀境務司

清太郎、岩國發軍周防富海に向ふ

兵庫京阪方面



数少ない 防長庶民の維新体験記

東行記念館学芸員 一坂 太郎

長州藩の維新史を調べていて、いつも残念に思うことがある。それは、功成り名遂げた元勳たちの回顧談はたくさん刊行されているのに、庶民のそれが意外と少ないことである。

長州藩は、上は殿様から下は庶民に至るまで一致団結して幕府に立ち向かった、特異な藩である。志があれば「匹夫」の入隊も許すとうたった奇兵隊や諸隊はその典型であろう。

西郷隆盛ですら「土族至上主義」の感覚を終生抜け出せなかったし、薩長と敵対した会津藩でも、戦ったのは武士階級だけであった。長州藩のように、庶民が直接維新にかかわることは少なかったのである。

敗者となった幕府側には庶民から見た記録が多い。彰義隊士の孫である子母沢寛が、生き残りの関係者を訪ね歩いて書き上げた『戊辰物語』や『新選組始末記』は、最もよく知られるところであろう。

それに反し、勝者の栄光にかざられた長州では、庶民レベルの回顧談は重視されなかったと思われる。有能な人材はすべて東京へ出て、闊をたどって軍・官に立身出世の道を歩もうとしていた当時の雰囲気を考えると「庶民の記録」など、望む方が無理というものだろうか。

そういった意味で、このたび復刻される『維新戦役実歴談』は、長州庶民の維新体験談が豊富に収められた、まことに貴重な一冊といえよう。

本書は大正六年十月十四日、靖国神社で催された、旧長州藩の「維新戦役戦没者五十年祭」で配布するために編纂、刊行されたものである。

「語り手」として本書に登場する二十九名のうち、吉田祥朔編『増補近世防長人名辞典』で事歴が確認できるのは、山県有朋ら九名に過ぎない。残り二十名は、人名辞典にも名を残さなかった無名の人々なのである。

これらは、いずれも白刃砲火の下をくぐり抜けたものが残した「実歴談」だけに、迫力もあり、史料としての信憑性も高い。数ある防長維新史料を渉猟し尽くした研究者にとっても、新鮮で興味深い話の宝庫であろう。

中でも東北に進撃したときの話が多い。一兵卒の視点なので、敵を目前にした最前線での感情の動きや、残酷な白兵戦の様相が手に取るように伝わってくる。穴を掘って敵の屍骸を百人ずつまとめて埋めた話。敵兵の死体から立派な刀や時計を奪った話……。

奇兵隊に属していた者が、小倉戦争後、陣中で「一寸気に喰ぬことがあったので」石城山の第二奇兵隊に移って行き、それからは、「第一から行ったといふので、どんな規則を破っても小言の言ひ手がない」と、奇兵隊と第二奇兵隊の力関係を物語っている。こうした具体的な話は、他の諸隊関係史料にはあまり記録されていないようである。また、付録の年表も、類書がないほど詳細で、便利な資料である。

庶民の側から見た歴史の究明が盛んな現在、本書の復刻はまことに時宜を得たものであり、喜ばしいことと想っている。



奇兵隊6番小隊の戊辰凱旋記念写真(武広家蔵)

目次

- ①伏見鳥羽役(児玉恕忠)②東海道白河会津方面(杉山素輔)③伏見鳥羽方面(故伯爵林友幸)④東海道江戸方面(故男爵木梨精一郎)⑤越後方面(佐藤保介)⑥越後方面(宇野友治)⑦関東白河会津方面(山本楳治)⑧奥羽方面(藤山敬三)⑨越後方面(小島荒一)⑩伏見戦争並びに前後関係(松村源一)⑪函館役(児玉恕忠)⑫函館方面(賀屋義矩)⑬白河会津方面(斎藤太郎)⑭越後方面(道十六)⑮山陽東山白河会津方面(山田仙三)⑯越後秋田方面(白井胤良)⑰磐城平方面(大谷靖)⑱越後方面(増山作輔)⑲磐城平方面(男爵沖原光幸)⑳函館方面(海軍小泉少太郎)㉑越後方面(林練作)㉒越後方面(故谷村小作)㉓伏見方面(子爵三浦梧楼)㉔備後東海道江戸白河会津方面(男爵有地品之允)㉕東山道関東白河方面(男爵梨羽時起)㉖東海道白河会津方面(河村正之)㉗函館方面の一部に就て(梅地庸之允) 林頭 江村忠精 長陸関係及び越後戦争(公爵山県有朋)

付録① 維新戦役長藩出兵年表
 ・兵庫京阪方面・尾道及伊予松山方面・東海道方面・東山道方面・常州平潟方面
 ・越後方面・奥羽方面・越後方面海軍動静・北海道方面

付録② 各方面戦闘略図 五枚
 解説 一坂 太郎

■体 裁 A5判六〇〇頁

■定 価 クロス装・箱入 八千円(〒450)

■三点セット特価 四万円(〒共)

■特価締切 94年6月30日

■発 売 94年9月上旬

■限定五百部復刻(番号入)

▼セットのばあい分割・ボーナス払いに応じます。

▼僅少数のため、売り切れの際はあいはいご容赦願います。

▼この叢書の後半の三点には高値本はありません。

〒744徳山市銀座2
 ☎(083)221295 マツノ書店